農業への努力

その三…次郎長開墾

昭和五十六年九月五日号

次郎長町は駿河の海を一望に眺める富士山麓の標高三百五十㍍ほどの開拓地です。広さは二十四万平方㍍(約七十二八町歩)。明治七年、清水の次郎長が、江尻の囚人を使って開墾をはじめました。

実際に現地の指揮をとったのは次郎長の養子となった天田五郎という人でした。しかし、酸度が強くやせた土地のため農作物は出来ず、十年後に中止し、不成功のまま全員で引き揚げてしまいました。

原野に戻ってしまった土地を再び開墾したのは、山梨県や旧安倍郡、御殿場、裾野からの入植者でした。

次郎長町

木を切り雑草とたたかい、岩石を砕く苦しい労働の連続でした。こうした結晶として現在の集落の基礎ができたのです。

広々とした畑に囲まれて六十九世帯、一百七十九人が住んでいます。

部落の中心には白髭神社が祭られています。

ここまでくるのに苦労したよ

村松常作さん（次郎長町）

昔は限られた作物しか出来ず、生活も苦しかったヨ。この土地だけでは食えないから男は出稼ぎをした。私の父も伊勢の方まで行ったものだ。

電灯は昭和のはじめの頃には入ったが、水道は昭和三十年代になってカナ。それまでは天水に頼っていたのさ。

今では便利になったものだ。畑も立派になった。苦労してここまで来た農業をもっと大切にしてほしいね。

次郎長開懇記念碑